

パネル

及を要すること、また殉教精神の純粹性については武士的精神の純粹性を単に批判的に読みこむだけではなく今一度批判的に再考すべきであるといった示唆を受けた。比較論に関しては、釈義学上、比較自体が「意味領域の重なり」をはかるものであるとのコメントを受け、発表者からは、比較というものがただ理解や解釈のためだけではなく説明の道具としても使われるとのレスポンスがなされた。さらにフロアからは愛や平民道への射程に関わる質問なども出され、そうした議論のなかで本パネルの意義がいつそう鮮明となった。

キリスト教思想の新しい可能性

——「宗教と科学」の問題圏より——

代表者 芦名定道

コメンテータ・司会 今井尚生

科学と神学

——対話の地平——

濱崎 雅孝

本発表のテーマは「科学と神学の対話」である。ここでもまず、そもそも科学と神学が対話をする必要があるのか、という疑問が生じるかもしれない。神学の側に立てば、神学の学問性を証明するために科学との対話が必要であるということになるだろう。科学の側に立つと、現代において近代科学の方法論が根本的な欠陥を有していることが明らかになっているため、科学がこれまで排除してきた領域（宗教もその一つである）を見直す必要が生じてきたと言つてよいだろう。この二つの必要性は、根本においてつながっている。すなわち、神学の学問性を問うということは、単に神学と科学の共通点を挙げるということではなく、近代科学の限界を乗り越える手段を神学は提供できるのかと問うことでもある。

次に、科学と神学の対話を可能にするための地平がどこに開かれるかを考える。一般的には、科学の出発点となる経験は客

パネル

観的なものとして認められているのに対して、神学の出発点となる経験は、信仰のように主観的なものにすぎないと考えられている。したがって、両者はその出発点の段階で別次元にあるため、対話の地平など開かれていないように思われる。

そこで神学者のパネンベルクは、「すべてのものを神との関係において考える」という視点を取り入れる。つまり、自然科学の対象となる自然現象を神との関係において考え、その説明が客観性を持つと認められる場合には、神学が科学と同じ地平に立っていることが証明されたとするのである。ここでは神の存在が前提されているわけだが、これを一種の仮説として用い、その説明が客観性を持つことが示される範囲において、その仮説の正しさも認められると考えるのである。つまり、科学と神学は扱う対象が同じであるが、そこで用いられる仮説が異なっているということになる。

しかし、ここで仮説となっている神の存在は、信仰者の主観的な経験にすぎず、自然科学が用いる仮説と同等に扱うことはできないのではないか、という反論が考えられる。自然科学において前提とされる自然現象の存在は客観的なものであるのに対して、神の存在は主観的であるから、仮説としての立場を要求できないように思われる。しかし、自然科学は自然そのものではなく自然現象（自然の現われ方）を扱っているものであり、自然の現われ方そのものは主観的な認識にとも言わなければならない。したがって、その自然現象を前提にすること、神の存在（これも神の現われ方にすぎない）を前提にすることは同等の仮説ということになるのである。自然現象が客観的であ

ると考えるのは、我々が目の前にある事物を知覚するときに、私以外の他者によっても同じ事物が同じように知覚されているはずだという前提があるからである。しかしこの前提には何の根拠もない。根拠がないにもかかわらずその前提が疑われないのは、我々がその前提に基づいて生活していても不都合を感じないからにすぎない。もし不都合が生じた場合には、その前提がただちに怪しいものとなるのである。

これと同じことを神の存在（現象）にあてはめると、現代においては神の存在を前提にして生活すると様々な不都合が生じるということが分かる。近代科学の成功によって決定論的な自然の見方が当然のこととして受け入れられたために、神の存在が不要なものになってしまったことも、その不都合の原因の一つであろう。ということとは、そのような不都合を取り払うことができれば、神の存在を前提にした議論が科学理論と同じ地平に立つことを妨げるものはないことになるだろう。したがって我々の課題は、その不都合を取り払うための新しい思考の枠組みを提示することになる。

美のアイデアと自然の神学

—— プラトン、数学、キリスト教 ——

落合 仁 司

神を語ることに於いて、譬 parable あるいはその構成要素である隠喩 metaphor は不可避の方法である。何故なら神を